

## 編者後記

農学博士 浦城晋一 三重大学名誉教授

1941年にヨセフ・アロイス・シュムペーターは一つの仕事を完成し、他の仕事に取りかかっていた。言うまでもなく、「資本主義・社会主義・民主主義」が前者の所産であり、「経済分析の歴史」が後者の所産である。言われているところでは、前者は気晴らしに、また気軽に通常の読者のため書かれ、後者は能う限りの努力をもって高水準の学者達のため書かれたとされる。しかし前者もまた傑作のひとつであることは確かであり、ポリティカル・エコノミーの分野における諸古典の中の一つである。上記の二つの仕事を取り替わった時、前者の草稿文書類(manuscripts)——出版書に印刷された稿だけでなく、1)用いられなかった章句(passages) 2)諸論点を図式化したスケッチ類 3)この仕事の各局面を形成するため各種各様のノート類をも含む——は、シュムペーター自身によって彼が通常そうしたように取っておかれた。彼は後者の形成に自らの学的全精力を投入したのであり、それは1950年まで続いた。前者に関して言えば、1947年の第二版に際しても、その内容的変更は何もなされず、ただ、1)「第二版のための変更」なる序文と、2)「第二次大戦の帰結」なる一章の追加と、3)「社会主義への行進」なる小エッセイの付加だけがなされた。しかしながらその間(1942-1947)のノート類といったものは書かれており、第I版の部分と併せて取っておかれている。他方後者は予期を超えた遥かに重い仕事となり、自らを消耗し尽くし、ともかく仕上げに至ったとは言え、1950年、その完成を目前にして突然死した。そこで彼が秘書に打たせたタイプ打ち草稿類は彼の妻エリザベス・ブーディ・シュムペーターによって一巻の書に編集された。彼女の手によって前者の草稿文書類——その殆どは自筆であるが一部に秘書のタイプ打ち稿もある、全体で約1700枚——は日本に渡来したのである。その経緯は次の如くであった。

最初に関わりのあったエリザベス・ブーディと東畑精一について考慮が払われるべきである。一人のエコノミストとして、また親日家として、彼女は日本の経済学会で夫がよく知られていること、とりわけ東畑精一と中山伊知郎の諸業績を良く心得ていた——二人は嘗てドイツ・ボン大学時代にシュムペーターの下に学生であった時期があり、夫の仕事である「経済

発展の理論」と「経済学史」（この書が「経済分析の歴史」の底本となっていることに注意されたい）の日本語版の共訳者であり、更には問題の書である「資本主義・社会主義・民主主義」（第二版）の日本語版の共訳を成し遂げつつあった（1947－1951）。そうした状況下で、とっておかれていた問題の草稿文書類は彼女（エリザベス・ブーディ）から彼（東畑精一）に与えられた。彼女と彼との間に書簡の遣り取りがあり、彼女が彼に与えた書簡の幾つかは今も残されている。それらを通してその過程が推定され得る。1）彼に対して彼女は「経済分析の歴史」のタイプ打ち草稿が含まれている一式のマイクロフィルムを送り、彼に同書の文献的な誤りの校閲（checking）を依頼した。そこで彼は能う限りの範囲でその依頼に応じた。・・・彼にとってこの仕事が後年その書の日本語訳に連なったことは疑問の余地がない。・・・2）彼女に対して、彼は日本語版「資本主義・社会主義・民主主義」への序文の寄稿を依頼し、更には彼女の故夫の記念になるような何かを——日本ではシュムペーターの著作がよく読まれ、且つ関心をもっている者が多いという故をもって——貰うことを願った。彼女はこれに応えた。1951年11月付けの彼女の彼に宛てた書簡にはその旨が書かれている。『「資本主義・社会主義・民主主義」の草稿文書類は日本へ行くべきだ、と私は考える、而して私はこのようにして故シュムペーター教授の本のいくつかを貴殿がもつことを見たい」、「草稿文書類については私は何時にても貴殿に引き渡すことができる」。このようにして彼の学生であった古谷弘が出向いてこれを受け取り、彼の下に持ち来られた。その後問題の草稿文書類は、時折日本のエコノミストの間で話題になることはあったが、彼の書庫の中に置かれたままとなり永く眠っていた。

1984年、彼、つまり、東畑精一が没した。その10年程前に、三重県庁は彼の郷里の家屋敷を処分して、その近くにあった三重県農業技術センターの敷地内に東畑記念館を建てていた。というのは、彼は偉大なる一人のエコノミスト——とりわけ経済学一般と同様農業経済学において——であったが、その傍らで彼は三重県当局に対する最も重要な顧問でもあったからである。そうしたことで、彼の死と同時に生前の意志に基づき、彼の蔵書類の大部分が三重県に寄贈され、このホールに備えられるべく搬入された。諸書・諸論文・諸報告・諸調査資料及び他の諸書類が約15000点あり、その中に問題のシュムペーターの草稿文書類が外国雑誌と共に重ね合わされてあった。次いで必要とされたのは寄贈書籍類の捨てるか保存されるべきかの選別と、その適正に位置付けられるべき分野の諸カテゴリーに即した分類であった。そうした選別と分類をなすために私が指名

された。私が大学生時代、東畑教授の門下生の一人であった、センターの近くに住んでいた、三重大学教授として時間的融通をつけ得た、遠縁の者であった、というのがその理由である。この仕事は、間欠的にではあったが、1984年から1986年にかけて行われた。その選別の過程で、当然の結果として、私は1985年2月に自筆の草稿とノート類等を発見し、その一年後タイプ打ちされた草稿を発見した。その採られるべき適切な方法は、本物はセイフティボックスに保管し、その一方内容の研究等の研究はそのコピーをもって行われるべきだ、と私は考え、事実、そのようになった。1995年頃——その時から10年が経過した頃——記念館にあった東畑文庫は三重県立図書館内の東畑文庫へと、その所属を替えた。行政整理の一つとしてである。問題のシュムペーターの草稿文書類もまた一緒に所属替えとなった。このようにして現在(2012年)、それはそこに存在している。

発見せられた草稿文書類は3種がある。

- A. 自筆草稿、B の鉛筆で黄色の下書き用紙(30×20cm)——24罫線入り——の上に英語の草書スタイルで書かれている。各用紙は綴じ合せていない、言うなればルーズである、またページナンバーは部分的に入っているものもあるが、原則として入っていない。但しかなりの枚数が草稿から転用されて諸論点や諸争点を整理させるためのノートになっている。その場合はC種と同じである。全体で約1200枚あり、この種が草稿文書類のメジャー部分を構成している。
- B. タイプ打ち稿は約300枚、但し相当部分がA種と重複している。
- C. 手書きの諸ワード、諸フレーズ、諸文章が小型の黄色の用紙といったもの書き込まれている。但し諸ワードの配置は各ケースごとに推定されなければならない。英語とドイツ語を混交させて素早く書かれており、英語文字の場合は単に短縮文字が用いられているだけであるが、ドイツ語文字の場合は殆ど速記文字が用いられている。この種は本を形成していくための諸ノート乃至は覚書である。

A種の発見後、私はそれを読むためのミーティングを今岡氏・米川氏・木南氏ともつことにした。ミーティングは僅か数か月しか続かなかつたが、お蔭で私はシュムペーターの草書文字を読むことが出来るようになった。そこでA種・B種・C種の全内容を、一人だけになつてでも、表出させることを決心した。私が行った最初の仕事はA種と刊行本の中の差のチェックであった。A種に属する各紙片につき刊行本の中に一致する部分を探

し尽くすことが試みられた。この仕事は相当に煩わしいものであり、完了するまでに約2年を必要とした。しかしこのチェックの結果として、1) 刊行本「資本主義・社会主義・民主主義」(第一版 1942年)の約80%がA種によって覆われている、2)一致しているその部分——私はそれをAa種とよぶ——は刊行本に記述された内容と殆ど同じである、3)Aa種はA種の約60%を占め、その残余——私はそれをAb種とよぶ——は刊行本の中にぴったりとは当てはまらないといったことが見い出された。第二の仕事はB種について同じことをチェックすることであった。結果として、1)B種の約半分はA種と重複しており、2)そうした重複部分を除いた残余は2種に分けられ、その半分が——私はそれをBaと呼ぶ——刊行本に一致した内容を持ち、他の半分の残余——私はそれをBbと呼ぶ——が刊行本の中にはぴったりとは一致しない部分であること、3)刊行本の中でAa種によつては覆われなかった部分はBa種によつて裂け目なしに覆われる、といったことが見い出された。[AbとBb]と[AaとBa]の関係の中には次の点が注意されなければならない。前者の中にある多くの章句はそれらを後者に書き替えることによつて発生したものである、だから当然のこととして前者は後者と似たところを多分に含む。後者にあるものと殆ど同じ文章またはパラグラフさえもがそれに含まれることがある、しかしそれらのそれぞれはいくつかの局面で後者とは異ならしめられていて、決して後者に埋没させられ得ないとみられた。

私はその草稿をもつて刊行本を再構成することを成し遂げた。私はコピーをもつてつくつたそれを三重県立図書館の東畑文庫の傍に置いた。もし本物の草稿をもつてこれをつくるならば、それは一つの重要文化財乃至は非常に貴重な文書類となるかも知れない。しかしながら、それにも拘わらず、それはシュムペーターの諸業績を研究するための資料として寄与すべき何物をも含んでいない、その故はその内容が刊行本と同じなのであるから。而して若しいくらかの寄与が求められるならば、それらはAb種、Bb種、それにC種といった残余の部分で以てなされなければならない。このことは誤解されてはならない。最も精製されたものは、もとより刊行本である。そして若し一巻のクラシックとしての刊行本がそうした未知の章句を極めて多大に伴っているのであれば、それを解読し読むことができる形態で提示することはそれ自体有意義なことであるだろう。更には以下の2点が考慮されるべきである。

- 1) シュムペーターは、自らの行論を配列して、それらを諸帰結の要

約にもっていくことに優れていた。その諸行論はテーマが非常に広範且つ包括的である一方で簡にして要を得ていた。「資本主義・社会主義・民主主義」のテーマは途方もなく大きい、刊行本は内容を400ページに収め、しかも各局面でのヴィジョンを保たせている。2) シュムペーターの尋常ならざる修辞の趣向が留意されるべきである。次のような表現・・・「資本家システムの持つ実際にみられ且つ見込みうべき成果は、その経済的失敗の重みに押し潰されての崩壊というアイデアを拒否してしまう程のものでありはするが、その正に際立った成功こそが、それを保護している社会的諸制度を掘り崩し、更にはその中でそれが生きることを得さしめなくするような、また更にはその後継相続者として社会主義を強度に指示するような、そうした諸条件を不可避免的に創出する、という命題」・・・この章句は嘗て、今日においてすら、シュムペーターの名の下に『資本主義の運命についての主要な命題の一つ』として受け取られている最も有名な章句である。しかしその含意は彼の修辞とレトリックの所為で逆説的な提示のようにもみられるのである。本書にはこうした修辞が満ちている。・・・この簡潔性と修辞のため、本書を彼の意を十分に体した如く理解することは容易ではない。十分な理解のためには関連文献からの補助線を引く必要がある。

しかしながら、上述の諸事実の傍らにあつて、[Ab + Bb + C]種は正にこの部分の中において、追補的・補完的・説明的な何物かを提供する多くの章句を含んでいることの故をもって、刊行本の理解を深め且つ広げるために有意充分なものがある、と私には思われたのである。AbとBbのケースの相当部分にあつては、その章句の中の冗長性・拡散性・付随性・逸脱性・重複性などが書き換えの理由であつたと推定されるのがその理由である。そしてAbとCのケースの相当部分にあつては、その章句の中に著者のイメージした・思考した・ひらめいた・想起されたなどの諸々のマインドについての多くの示唆に満ちたものがある、と推定されるのがその理由である。そのようにして更に、もしあればのことだが、刊行本の中には現れていない、著者の修辞の中に巧妙に隠されている、何等かの本音、リアリティがそこにあるかも知れないのである。分析的判断のための立体空間といったものの中で、刊行本は中心に位置するようセットされ、随伴者達——[Ab + Bb + C]種——はその周りに配列されている、としたい。そうすることで、読者をしてそれに関わる何事かを探らさせる、すなわち、随伴者達をセンター部分との関連を持たせながら交差させることによって諸問題と諸争点を見究めさせようとするのである。私はそう考えた。

このようにして、[Ab + Bb + C]種の内容の開示が必要となった。しかし、そうした仕事は決して容易でなかった。というのはそこにはドイツ速記文字を解読しなければならないという重い障壁があったからである。そしてそうしたタイプの速記文字が解読され得ない場合にあっては、C種のすべてが使い得ないし、Ab種のいくらかの部分もまた同様であり、Ab種の多くの部分が余白の部分に速記文字が書き込まれているので、その価値を減じることになる。この障壁を乗り越えるには、それを正しく読める人物を探し出す以外には方途がなかった。

いくらかの試みのあと、私は幸運にもそうした人物にアプローチできる人物の知己となるを得た。兼子次生氏であり、彼は日本における速記法の比較研究の指導者であった——今日彼の著書「速記と情報社会」が入手し得る、その中にシュムペーターの速記と私のことがふれられている。兼子氏は私が送ったシュムペーターの速記文を検討し、それがファウルマン型の草書スタイルではないかと思いつけた。しかし確信をもてなかったので、東西ドイツの速記協会宛てに鑑定依頼の照会を行ってくれた。その結果良い応答が東ドイツから得られた。DDRの速記者達の指導者マンフレッド・ケーラー氏はそれが古式のガルベルスベルガー型の草書体であると断定した——フランツ・X・ガルベルスベルガーは1834年にあらゆるグラフィックな可能性を駆使して彼の草書式速記体を作り上げた。しかしながら、ドイツにおいてさえガルベルスベルガーに練達の速記家はすでに極めて少なく、ケーラー氏の知る限りではアーサー・ハイム氏唯一人だけが私の目的を充たす有資格者であろう、という返信が得られた。ケーラー氏の紹介のお蔭で、私は彼の知己となることができ、更に私の手元にあるシュムペーターの速記文書の全体につき、その解読の要請に応諾が得られた。アーサー・ハイム氏は91歳という高齢にもかかわらず、極めて親切で快活であり、私の仕事を助けることを自分のもてる独特の能力をもってする国際的寄与として喜んでいるよう窺われた。そうしたやり方で障壁は1988年に完全に取り払われた。

1988年から1991年にかけて、次から次へと私は彼にシュムペーターの草稿文書類の中の速記文の部分を送り、彼の解読結果を受け取った。他方において英語の中の簡略文字については、もし読者が社会科学の学徒ならば、例えば、*inve. Opport.* ならば、*investment opportunity*、*comp. eff.* ならば、*comparative efficiency* といった如く解読し得るものであった。

このようにして私は諸行論または諸論評などの素早く書かれた部分を読むことができた。更に私は、ともかく、[A b + B b + C]種の全体、すなわち、刊行本「資本主義・社会主義・民主主義」に含まれる部分を除いた残余の全体を通観するを得た。

そうした後、最後になされるべき仕事は、それをその適正な場所に配列させることであった。この最後の仕事について当初、1990年頃、私がイメージしていた状態は、そのそれぞれのパセージがすでに私がつくった前述草稿版「資本主義・社会主義・民主主義」の中の脚注または各章末の後記として付加されている如き状態であった。しかしそれは私には不可能であった。その故はそうしたパセージの多くがその含蓄において、外延的にも内実的にも、刊行本の然るべき場所とうまく符合しないためであった。そこで結局、刊行本における行論の展開の次第に沿って配列していくほかには私にはなすべき方途がなかった。それらを類別し、秩序立て、そのようにしてそれらを刊行本に対応させられる一書をつくる試みとして構成していくこと、すなわち、今一つのシュムペーターの「資本主義・社会主義・民主主義」の別冊本を構成すること。しかしながらこの仕事も——私の語学的貧しさと連なるものではあったが——一見して思われた程には単純でも容易でもなかった。そこで私は各パセージ毎に原文の清書——但し速記文字は普通のドイツ文字に直されている——を付し、更にそれに日本語訳を付すという作業を施し、原文とハイム氏からの速記文字のドイツ語訳と併せ、1995年頃までに四者を綴じ合せたセット600部程をつくった。このようにして私はこの仕事を一応なすを得た。しかし結果は不出来且つ不満足極まるものであった。2回、3回と再配列を試みたけれども、その後ですら不満足であることに変わりがなかった。かくして、10年間以上それらは私の傍に積み上げられ、そのままにされていた。

2011年、私は80歳になった。体調不良が様々な病気を伴って噴出し、とりわけ動脈硬化・脊椎変形・ぼけが進行し、死が遠くないことを自覚した。状況は切迫しており、私は過ぎた年月を他のこと、例えば、我が家の古文書の解読とか漢詩文・仏典類の訳出とかに気を逸らしていたことを悔いた。そうした時、たまたま、秀逸な古文書解読家に出会った。井上孝榮夫人で、私のまたいところになる。我が家の古文書の彼女の訳文を読んで、そのアウトプットが驚くべきことに、単なる完全な解読のみならず、私が予期していなかったいくつかの重要なファクト・ファインディングをも引き出していたのである。彼女は古文書の取り扱いに精緻且つ厳格であ

った。その時、私は知った。シュムペーターの草稿文書類についての私の仕事は、言ってみれば、古文書の取り扱いの問題であったのだ、と。今一つの「資本主義・社会主義・民主主義」をつくるなどの試みはあまりにも不遜であったと思われた。かくして私はこの仕事を古文書の解読と翻訳の一報告書をつくる仕事として今一度挑戦することを決心し、彼女に提携を要請し許諾を得た。彼女もこの仕事に関心をもつところ大なるものがあった。このようにして今一度の再配列をそうした見地から行った後、なお満足され得るものではなかったけれども、この配列を締め切った。・・・II—(4)—13は、このコレクションを単独でも読みうる一書に構成するため私が追加したもので、刊行本の中にある「知識人の社会学」のアウトラインとしてつくられている。古文書の集成の見地からは排されるべきであろうが、この部分に限ってそれをそのままに残すことにした。・・・そして全セットは彼女に送られ、彼女が私のつくった清書をシュムペーターのオリジナルを通閲しつつチェックし、その清書でもって私の手書き日本語訳をチェックし、その結果をタイプライティング・マニュスクリプトに直す作業を行った。アウトプットは逐次作業済のセットと共に返送され、私がそれを同様に再チェックし、改めて配列の順序に即したハンドライティングでの再清書一式の作成と彼女によりタイプ打ちされた日本語訳の校正を行った。この手書きでの再清書一式が原書(original text)であり、原書と日本語訳が同時に出来た。

未だなお不完全で不満足なものであるとは言え、私は今存命中に草稿文書本、追補版「シュムペーターの資本主義・社会主義・民主主義」を刊行版に相對置させられている全パセージを用いることにより作り、且つその日本語訳を作った。そうすることで、こうした由々しい研究資料の発見者に帰せられるべき義務を私は果たすことにする。更に私の能力の故にかくも遅れてしまったことをば、どうか許していただきたい。最後に私の特別の謝意を故アーサー・ハイム氏と井上孝榮夫人に帰させたい、兩人なしには私はこの仕事をなしえなかった。更にいつも激励を賜った今岡日出紀氏に感謝する。

本書のどの部分も未だ印刷に付せられていない。尚いくつかのコピーが、然るべき人物または所に送られるであろう。

2013年 春

